

位」と刻された墓碑を發見するに到り、こゝに荒井氏の研究考證が進められ、從來京都妙心寺を始め全國各地十數ヶ所に於て、藤房卿の墳墓と稱せられたるものは、何れも其確實性を缺いて居つたのであるが、こゝに藤塚は銘碑墓碑共に完備するを以て、明かに其墳墓たる事を證するに足るといふ結論を與へらるゝに到つたのである。而して其「墳墓考」は、一、新に發見された藤房卿の墳墓 二、常陸に於ける藤房卿 三、藤房卿の遁世 四、曹洞宗の展望 五、無等良雄禪師 六、結語の六項に分ち、該博なる蘊蓄を傾けて、透徹せる討究考證を、簡潔達意の名文を以て綴られてある。又其附録として、岩間町長梅里好文氏の「藤原藤房卿墳墓發見始末」を添へてある共に我國史上の一大文獻たる價値を有するものといふべきである。殊に吾人の意外の感にうたれたのは、從來史上に、出羽の藤原氏と稱せられて居つた、曹洞宗の第七世無等良雄禪師が我藤房卿であつた事である是亦我佛教史上の一大發見であるといふべきである。

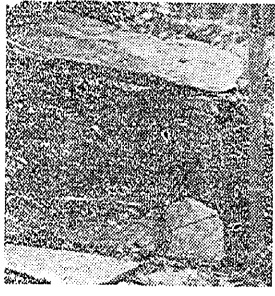
之を要するに我々は、之が發見并に研究にあたられた、岩間町民各位、吉澤一男、荒井庸夫兩氏、又之を認められて、其事蹟發揚の爲に、物心兩方面より、多大の聲援を與へられたる、阪谷男爵及警城炭礦幹部に對して、満腔の敬意を表するものである。而して記者は慰靈祭の日

藤原藤房卿五百七十二年

御忌慰靈祭參列の記

警炭礦業所副所長 濱崎善三郎

十月十日午前七時三十分分發、上り列車にて内郷村報社大内氏惠民同道出發、午前十二分岩間驛着、町役場に到り梅里町長に面會、時刻の餘裕なければ、



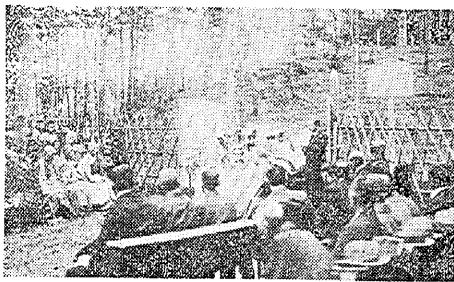
藤原の墓石

直ちに自動車にて、驛より約十四五丁の距離にある藤塚の式場に赴く。式場には既に岩間町小學校教員兒童千二百名、青年團、女子青年團、消防組、青年訓練所

「吉野拾遺」に見えて居る卿が越前鷹巢山の草庵にのこされた
こゝも又浮世の人のさびくれば
空行く雲に宿求めてん
の詠歌に因みて
行く雲を宿のありかも明らめて
いさな、更に仰ぐ今日かな
の蜂腰一首を、恭しく靈前に捧げて、參列の光榮に感激した次第であつた。

生徒其他有志多數參列せり
總數約二千名、塚の最上部に「藤塚」と書せる標木、中段に「萬路小路中納言藤原藤房卿追弔碑」の木標を建て、塚の周圍は全部青竹の矢來を廻らし、前面には開閉扉をしつらへ、扉の側に左の揭示板あり。

元光西寺跡藤塚は南朝の忠臣藤原藤房卿細墓なりとの事にて其筋に於て更に取調中に付猥りに立入り汚す事なき様御注意を乞ふ
昭和九年十月
岩間町役場
扉の少し内側に、發見せられたる藤房卿の銘碑及墓



濱崎副所長參列趣旨演說の光景

碑を机上に安置し、扉の外側に二段に御供物を供へ、供物には男爵阪谷芳郎敬供と紙に書して添付せるものあり。御供物臺を挟みて兩側に、來賓其他有志の椅子席を設け、一般參列者は立てる儘なり塚の全面はもとより、近接せる地域も、清掃行き届き、全體より見て質素ななれと心の籠れるしつ

らへなり。式次は左の通り
一、諸員着席 二、僧侶着席 三、讀經 四、町長焼香並に弔辭 五、來賓焼香並に弔辭 六、挨拶(町長) 七、一同退席
午前十時半開式、僧侶七名讀經の後、町長の焼香弔辭あり。
之より先き梅里町長は、予に向ひ「阪谷男爵より自分に讀せよとて祭文が參

り居るが貴方が讀んで貰ひ度い」との語あり「男爵が折角町長さんに讀んで貰ひたいとの御思召なれば町長さんがよからう」と申せし處「否々私は此地の者なれば
拜啓 去る日藤房卿五百七十二年忌に參列すべき旨御電話拜受の直後大内氏來所相成本社に於ての御話の模様詳細承はり尙阪谷男爵より専務殿宛の書面も拜讀仕候 御仰に従ひ去る十日大内氏同道御慰靈祭に參列無事歸山仕候 別紙に概略御報告申上候
尙當日岩間町長に乞ひ式場の寫眞撮影を依頼致候寫眞は男爵には直接御送附する由に御座候 男爵閣下には尊臺より可然御風聲願上候 敬具
昭和九年十月十二日
礦業所 濱崎善三郎
前川專務取締役殿
追而只今岩間町長より禮狀に接し申候 同封仕候御高覽願上候 再拜

拜啓 過日は岩間町に御出張御苦勞奉謝候 大に警城炭礦の面目を施したる次第も存候 早速阪谷男爵に報告致置候處 別紙の通り返書參り申候 (後略)
十八日 前川 濱崎大兄 侍史

ばむしる男爵と同じ會社に居られ他所より來られた貴方が讀んで下さつた方が一般參列者に對しても具合がよい」との町長のたつての話あり。予もなるほどと思ひ應諾せり。
(以下三ページへつづく)

(二面よりつづく)
男爵の弔辭を内讀せしに實に熱烈な御心情のこもれるものにて、予も今更心を

元大藏大臣、東京市長をなさつた御方で、現に貴族院議員であり、法學

盡力によつて、救救の寫眞をとつて、早速男爵に

まゝ然るに其後藤房卿五百七十二年の御命日が來るから山

ます。
(男爵より前川專務取締役宛十月四日附御手紙を全文追書まで朗讀す)
如何に男爵が藤房卿の御

(二面よりつづく)

男爵の弔辭を内讀せしに實に熱烈な御心情のこもれるものにて、予も今更心を打たれ、是ならば是非男爵の御志の程を、一般參列者によく徹底せしめばやと、心の燃え立を覺ゆ。



阪谷男爵

光榮とせし所なりき。私は隣縣福島縣にある磐城炭礦株式會社の事務長をしてをる濱崎といふもので御座います。本日は私共まで藤房卿の御慰靈祭に參列さしていたゞき寔に有り難き仕合せと存じます。實は阪谷男爵には、本日こゝに來られて、親しく御焼香祭文を捧げられたいどの御心組でしたが、御病後の事とて、残念ながら私に代參せよとの事で御座りました。阪谷男爵は皆様御承知の通り、

元大藏大臣 東京市長をなさつた御方で、現に貴族院議員であり、法學博士の學位をも持たれた。私共の磐城炭礦の取締役をして居られます。「奉公」といふ雜誌に出でるた、こゝに居られる荒井先生の書かれた、藤房卿墳墓考の文章を御覽になつて非常に御喜びになり九月二十二日會社の重役會席上でもその御話がありました。

祭文

正二位中納言藤原藤房卿 建武元年冬官ヲ棄テ、遁世セラレテヨリ今日ニ到ルマテ六百年 史家必死ノ穿索ニ依ルモ 終ニ確タル足跡ヲ知ルニ由ナク 建武ノ天子 深ク宸襟ヲ惱マサレタルコトハ申スモ畏シ 苟モ世ノ勤王ニ志アリ 大義名分ノ何タルヲ知ル者 切テハ其蓋棺ノ地ヲ知ラント欲シ 私カニ心ヲ苦シメザルモノナカリキ 卿ハ實ニ建武中興ノ元勳ニシテ 卿ノ御一生中極端ニ窮迫ノ場面ハ 元弘元年笠置落城ノ時トス 卿ハ三種ノ神器ヲ保護シ 後醍醐天皇ノ御供ニ竊カニ賊國ヲ逃レ 有王山ニ向ハレタル途 雨降ルモ雨具ノ御用意ナク 三晝夜恐レ多クモ 天皇陛下ニハ御空腹ヲ忍バセラレ 痛ク御疲勞遊バサレ 終ニ深須三郎ト云ヘル者ノ手ニ捕ハレノ御身トナラセ賜フ 此時ノ御製ニ

藤房卿御返歌ヲ奉ル

いかにせんたのむ陸にて守寄ればなほ袖のらす松の下露 史ヲ讀テ此所ニ至レバ六百年後ノ今日ト雖モ 何人モ卷を覆フテ涕泣セザル者ナシ 其後遙逝北條高時ハ 勿體ナクモ 後醍醐天皇ヲ隱岐島ニ遷シマイラセ 又藤房卿ハ常陸國ノ此地方ノ豪族小田氏ノ所ニ流サレ 建武中興ノ日マテ留リタマフ 次テ京都ニ歸リ新政ニ參與セラレタルガ 意見行ハレズ 終ニ遁世セラレ 其踪跡知ルニ由ナカリシニ 圖ラザリキ昭和ノ今日 岩間町民諸君並歴史家荒井庸夫氏ノ盡力ニヨリ 卿ノ墳墓ヲ發見シ 今月今日卿ノ五百七十二年祥月命日ニ當リ 初メテ土地ヲ清メ 香花ヲ供ヘ 卿ノ靈ニ對シ 敬意ヲ表スルコトヲ得 歡喜極リナリ 芳郎ノ如キ實ニ手ノ舞ヒ足ノ踏ムヲ知ラザルナリ 思フニ卿ノ遁世ハ 一朝ノ憂憤ニ乘リ佛門ニ入り 一身ノ安キヲ求メラレタルモノニアラズ 深ク時勢ヲ觀察シ 陰ニ全國ニ渡リ 勤王ノ士氣ヲ鼓舞シ 南朝ノ後援ヲ爲シ 其不屈不撓ノ精神ハ凝テ 暗ニ常陸人士ノ氣風ヲ作り成シ 義公烈公ノ如キ明君 東湖ノ如キ賢臣ヲ出スニ至リタルニアラザルカ 而シテ之等明君賢臣ノ言行ニ依リ終ニ日本全國ノ士氣ヲ大ニ振興シ 明治維新復古ノ偉業ヲ見 現在地球上唯一優越ノ國體ヲ以テ誇リトシ 世界的大國トシテ 大和民族ノ偉大ナル勢力ヲ振フコトヲ得ルハ 必ズヤ卿ノ地下ニ於テ満足セラレ、所ナラン 謹ミテ蕪辭ヲ列シ卿ノ御墓前ニ告グ奉ル

正二位勳一等法學博士男爵 阪谷芳郎 頓首々々謹白

元では會社專屬の寫眞技師をこゝに遣はし、町長さん達の御造はし、町長さん達の御

ます。(男爵より前川事務取締役宛十月四日附御手紙を全文追書まで朗讀す)

如何に男爵が藤房卿の御事に就て、御關心を持たれて居るか、此御手紙でも御判りになつたらうと思ひます。

次は左の順序により、焼香弔辭祭文を捧ぐ 荒井庸夫、茨城縣會議員

拜啓陳者 昨日藤房卿追弔式執行に當りては、御遠路御多忙の折柄、御參列の光榮に浴し、且つ閣下より

紙は幸ひこゝに持つて來て居りますが、男爵が如何に藤房卿の御墓を見付かつたことを、喜んで居られるか、その御熱誠の程が偲ばれますので、私はこゝで

市川市郎、内郷村報社大内民恵(追悼歌別項掲載につき略す) 小學校長兼青年訓練所主事、女子青年團長、巡查部長、岩間町會議員代表、岩間驛長、岩間農會議長、在郷軍人會岩間分會長、岩間消防組頭、岩間青年團長、神職代表、岩間町區長代表

送りました處、非常に御喜びになつた模様であり、その御手紙を皆様に讀んで、御紹介致さうと思ひ

(以下四面へつづく)

内郵特別

地元區民代表、一般參列者總代。其後町長の挨拶を以て式を閉づ。

式後町長の案内にて大内氏と共に、銘碑墓碑を拜觀し塚の頂に登りて視察す。正午附近の農家にて參列者有志一同に、折詰瓶酒の接待あり。尙午後は藤塚の前面道路をへだてたる畑地にて、奉納角方、花火、芝居の舉行あり。午後二時二分岩間驛發歸山まで一時間の閑暇あり、町會議員仲田辰之助氏は列車出發まで、何吳れと吾等兩人の爲舞旋され、大内氏共々男爵の餘徳吾等に及ぶとて、大に感激したる次第なり。

名古屋市社會事業視察記

方面委員 田口淳三

十月十日名古屋市中於テ全國方面委員大會ヲ開催サル、ニ當リ出席ノ機會ヲ得タルヲ以テ八、九ノ兩日瀬戸市及名古屋市中於ケル社會事業ヲ視察ス概要左ノ如シ

二坪建物坪數二、二五二坪建築費二十九萬六千圓ニシテ、年費費七九、五〇〇圓ヲ計上ス、現在ノ收容人員ハ三三一人規模頗ル大ナリ諸般ノ設備簡然スル處ナク、又之レニ從事スル職員ハ何レモ奉仕的精神ヲ持シ専心事業ニ努メツアリ。

シ一人ノ看護婦アルノミ虛弱者ノ爲メ輕費ヲ以テ施行ス。三、大會 十月十日午前九時半開會國歌合唱大久保副會長ノ勸語挨拶、宣言決議報告ト進行シ、清浦會長ノ式辭、功勞者ノ表彰祝辭、閉會ノ式ト型ノ如ク無事終了時ニ正午ナリ以上ハ視察ノ概要ニ過ギズ要スルニ名古屋市中於ケル社會事業ト本縣下ノソレト比較センカ實ニ霄壤ノ差アルヲ見ルハ甚ダ遺憾トス、斯ル視察ハ獨リ方面委員ノミナラズ市町村當局者ニモ必要ナルベキヲ痛感ス。

鹿島御禮詣での記

余は多く湖を見たれども此處の如く氣もはげしく心ゆくばかりの景色を見たことなしなごき、賞めよ何時居るが、平凡なる記者には、何時見ても矢張り平凡にしか見えぬ、苦笑しつつ、フト窓外に五反帆を張つた、二三の小舟が見え、それが氣に入つたので、傍の人に聞けば、白魚をさる舟だとの事、先づ其光景を一瞥せんものさ、一人甲板に登つて展望すれば、雲煙模様の行手には無数の白魚舟が並び浮んで、壯麗云はん方なしだ。之は桂月も蘆花も見逃したる風景であらう、少しく冷風にへこたれつつも、熱氣を悉く。

動車で鹿島神宮に参る。正に一番乗りである。老松古杉にかこまれた境内は、森閑神嚴、塵一本なく一人一人は、拜殿に罷り上つて、中央に端座して、聲高らかに昭和七年正月三日、我等一家五人、國運安泰と、二十九勇士の武運長久とを、祈願し奉りたるに、悉くも御神慮を蒙り、國運は益々伸張し、勇士何れも偉功を建て、凱旋せり、我等感激に堪へず、今日こゝに謹んで御禮を言上し奉る。然して本日代表として、勳八等砲兵上等兵吉田喜代次を携同する豫定の處、家業に支障あつて不參せり、此儀御容赦を懇願し奉る。尙此鹿島里の隣家、鈴木武七長男武二、陸軍歩兵に合格し、年内に入營せんす。仰き希くは彼の上にも御守護の聖愛を垂れ給はん事を御願し奉る。恐懼謹言

右仲田氏の談るところによれば、阪谷男爵より拜賜の金子の内、約三十圓は男爵の御思召に添ふ様、矢來標本等設備に費し、殘金は神社建設の資金にもと保存せり、尙本日の催物及小學校児童一同に菓子と興へたる費用等は町役場より百七十圓を支出したりと。

當日今秋稀なる快晴の天候にて、此一日光榮と感激とに終始致したることは有り難き極みなりと。

鹿島御禮詣での記 余は多く湖を見たれども此處の如く氣もはげしく心ゆくばかりの景色を見たことなしなごき、賞めよ何時居るが、平凡なる記者には、何時見ても矢張り平凡にしか見えぬ、苦笑しつつ、フト窓外に五反帆を張つた、二三の小舟が見え、それが氣に入つたので、傍の人に聞けば、白魚をさる舟だとの事、先づ其光景を一瞥せんものさ、一人甲板に登つて展望すれば、雲煙模様の行手には無数の白魚舟が並び浮んで、壯麗云はん方なしだ。之は桂月も蘆花も見逃したる風景であらう、少しく冷風にへこたれつつも、熱氣を悉く。

鹿島御禮詣での記 余は多く湖を見たれども此處の如く氣もはげしく心ゆくばかりの景色を見たことなしなごき、賞めよ何時居るが、平凡なる記者には、何時見ても矢張り平凡にしか見えぬ、苦笑しつつ、フト窓外に五反帆を張つた、二三の小舟が見え、それが氣に入つたので、傍の人に聞けば、白魚をさる舟だとの事、先づ其光景を一瞥せんものさ、一人甲板に登つて展望すれば、雲煙模様の行手には無数の白魚舟が並び浮んで、壯麗云はん方なしだ。之は桂月も蘆花も見逃したる風景であらう、少しく冷風にへこたれつつも、熱氣を悉く。

此會に於て記者は、前記墳墓考に基き、一般讀者諸賢の參考に資する爲に、實惠を發見するに倒つた、

なる戦死を遂げたといふ、其追弔式を舉行し、越えて五月十八日其城址を永久に保存すべしと再申す。諸賢の實惠を發見するに倒つた、

發行所 大内民惠